

日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅱ

—— ボランティアやサービス・ラーニングによる他者理解に向けて ——

Development of the Service Learning in Japan Part Ⅲ

—— For understanding another person by
a Volunteer and Service Learning ——

大東貢生・富川拓・柴田和子・古川秀夫・山田一隆

要 旨

日本におけるサービス・ラーニングの展開として、東京都立高等学校における教科「奉仕」が与えた影響について、担当教員に対するインタビューに基づきまとめた。インタビューによれば、奉仕は生徒に学校外の地域の人との接点をもつことの影響、社会に役立つ喜びや認められることによる自信、社会の一員としての自覚から規範意識や公共心が芽生えること、地域社会への関心から地域社会に貢献する行動を行うことといった影響を与えていることが示された。

キーワード：サービス・ラーニング、奉仕、中等教育

1. 問題の所在

サービス・ラーニングとは、地域社会のニーズに応じた社会貢献活動に学習者が実際に参加・参画することで、地域社会に対する責任感等を養う教育方法である（富川拓・柴田和子・大東貢生・古川秀夫 2007：9）。先行研究において筆者らは、日本へのサービス・ラーニングの展開を7つに分類し、また実践事例を見ることによって、課題として①学習の主体、サービスの提供側である「学生、大学」とサービスの受け手側である「地域住民、行政・福祉団体・NPO 団体などの外部セクター」との間で、サービス・ラーニングに対する共通理解が形成できていない点、②日本でのサービス・ラーニングには受け入れ側、つまり地域住民や外部セクターに対してサービスを提供するという意識がない、

もしくは薄いという点の2点を指摘した。

この小論で事例とする東京都立高等学校の教科「奉仕」は、東京都教育委員会が平成16年4月に公表した「東京都教育ビジョン」の提言を受け、平成17年度の重点事業として「奉仕体験活動の必修化」が位置付けられ、平成19年度からすべての都立高等学校で東京都設定教科「奉仕」を必修化したものである（東京都教育庁指導部高等学校教育指導課 2006：i）。

以下では、教科「奉仕」をサービス・ラーニングとして見たときに、先行研究をまとめた①サービス対象者とサービス提供者に同等の恩恵があるのか、②教育機関と行政・福祉団体・NPO 団体などの外部セクターとの関係性、またサービス・ラーニングを受け入れる地域社会との関係性、③多文化共生や異文化理解との関係性、④市民性、特に東京都教育委員会のいう「生徒の規範意識を高め」「地域や都民が学校へ

の理解を深め、学校への信頼をいっそう高めていく」（東京都教育庁指導部高等学校教育指導課 2006：i）ことにつながっているのかどうか注意を払いつつ、特に、教科「奉仕」導入による生徒への影響について、インタビューを行った都立4高校の事例をまとめたい。

2. 方法－担当教員に対するインタビューについて－

2008年9月～2009年9月に都立A、B、C、D高校において、副校長、教科「奉仕」担当教員にインタビューを行った。インタビューは半構造化の形式で実施し、ICレコーダを使用して記録した。その後記録した音声データをスクリプト化してまとめた。以下、かっこ（「」）内はインタビュー内容である。

3. インタビュー結果

3.1 A高校での教科「奉仕」

A高校は郊外にあり昭和50年代の15歳人口急増期に設立された比較的歴史の浅い高校である。A高校での教科「奉仕」は「奉仕体験活動」を科目名称として行なわれており、1単位35時間で構成されている。中間・期末考査最終日と夏休み、土曜日に実際の活動が行なわれている。行なっている活動は里山の保全活動として「外来種の駆除活動（里山での草抜き）」「田んぼの保全活動」「稲刈り」「ゴミ拾い」と学校近隣の清掃活動である。また事前学習として、パワーポイントによる学習、森林レンジャーを外部講師として里山の歴史や保全の意義、注意点について学ぶことがある。事後学習として、振り返りを行なっている。

3.1.1 生徒への影響

それでは、担当教員はサービス・ラーニングの影響をどのように考えているのであろうか。

担当教員によれば以下の3点が語られる。

① 地域の人達とのふれあい

「農家をやっていたりした方や地域の人たちがボランティアで入ってこられるんです。その方たちと一緒に例えば秋の稲刈りなんかは元々その田んぼにいらした方々が集まって子どもたちにも農作業を教えてくださいます。そういうことを通して生徒全員が地域の人と触れ合っているんですね。」

*下線は著者が強調として引いた部分 以下同じ

② 得られるもの－勤労の大切さ－

「実際に働く子たち、動く子たちの方がむしろ自分たちにとって何か得るものがあるということ。子どもたちの方が動くんです。稲刈りをした時に初めてお米が出来る事、稲からお米が取れる事を知ったという子が随分いまして。当たり前のことなんですけど、「え、お米ってこうやって作るんですか」と。その次の一言が良かったです。「こうして農民の人たちが一生懸命作るんだ。これからは大事に食べなくちゃ」なんて。」

③ 社会の一員として

「三年生で総合の時間で里山に行く講座があります。去年の三年生は（教科「奉仕」導入前で里山に）行ってなかったんです、一年の時は。今年は一年の時に（里山に）行っていた子たちが自ら希望してきたんですね。（今年の一年生は）里山を知っていますから、（講座の担当教員が言うには）去年と今年は取り組みの意欲が違うと言う事でその効果は明らかに出ていますね。自分が何をやらなければいけないかという事、「そこには色んな人が来てくださっていて自分たちに教えてくださっているんだ」と。そういう意識が出来ているんだという事に今年担当の教員が感激していました。そういう違いは

如実に出ていますね。」

*丸カッコ内は著者が補った部分 以下同じ

3.1.2 A高校のまとめ

以上の語りから担当教員は、サービス・ラーニングによって生徒は、地域の人達と触れ合い、他人への共感が生まれ、社会の一員としての自覚が芽生えると考えているようである。

3.2 B高校での教科「奉仕」

B高校は東京都区部に位置する歴史のある高校である。ほとんどの生徒が旧学区である近隣地区から登校している。教科「奉仕」は「奉仕」を科目名称として行なわれている。35か所程度の受け入れ先を持つ「分散型」の奉仕体験活動を行っている。水曜日7講時に事前学習・事後学習が行われ、夏休みに受け入れ先での奉仕体験活動を行い、また7月に寄贈用雑巾の作成、12月には地域清掃活動を行っている。35か所の受け入れ先は、清掃活動、文化施設、宗教施設、学校保育施設、高齢者施設など様々である。生徒自身が行きたい受け入れ先を選択している。受け入れ先は奉仕担当教員1名が直接アポイントを取り開拓した。運営は当初全教員で行っていたが、今年度は1年生の担任を中心に運営している。

3.2.1 生徒への影響

それでは、担当教員はサービス・ラーニングの影響をどのように考えているのであろうか。担当教員によれば以下の4点が語られる。

① 社会に役立つ喜び

「生徒は純粹にほめられたり喜ばれたりする事を自分で取り込んでいますね。感想は様々な事を書いています但しプラスな面も沢山書いています。感想を見ている人から喜ばれたり、自分も満足感があるという、学校では出来ない体験をしている子はたくさんいるかと思ひます。保育

園に行った子がお母さんがお「兄ちゃんに遊んでもらって」と、今兄弟が少ない中でそういう場面が少ないですから、ちょっと年を重ねた高校生の男の子と遊んでお母さんが喜ぶ、間接的に子どもたちが喜ぶ姿を見てお母さんに喜ばれ、自分たちも役立ってる、受け入れられてるという事を感じてプラスになっているという場面は個々人何かしらあるんじゃないかなというふうに思っているんです。」

② 世代間交流－規範意識－

「教員ではない大人と外で接するというプラス効果はあると思うんですね。教員ではない人たちにどうやってコミュニケーションをとるかとか。やはり高校生の世界も閉ざされた世界ですよ。親類ではない全く別の方にあいさつをしたりとか。受け入れ先の方から指導を受ける場合もあるんですね。「髪の毛が茶色いのでちゃんと来て下さい」とか。教員から言われても素直には。子どもの方でも「これでは通用しないんだ」という気持ちになったりもしてると思ったりもしてるんですが。」

③ 自ら考える能力－社会の一員として－

「奉仕を通して得るものはすごく広くて急に効果は現れないかもしれませんが、例えば子ども自身が何かで自信をつけたりとか、あるいはこれが必要なんだという事を感じ取ったり。「外人さんから話し掛けられて思うように道案内が出来なかった」から「英語やらなきゃ」とか、「その地域だけでも自分で理解してなきゃ」とか。そういう事を言う子がいますのでね。やっぱり自分がその時に感じた事をプラスに変えていくと、そういう事をちょっと思ひました。」
-「(現在)3年生で、お婆さんが倒れていたのを発見して駆け寄って行って介護、救助をした(生徒がいます)。消防署に連絡をしたり近所の人と一緒に消防隊が来るまで。すごく感謝されて消防署から連絡を頂いたり家族の方から連絡

を頂いたり。自分からアクションを起こすという事が目の前に何かがあった時に。外に出て人の役に立つ事をやるというのは別段特別な事ではないみたいな、そういう気持ちになったのかなというのはありましたね。」

④ 公共心を担う活動

「(昨年の)12月ぐらいに急に「(部活で)赤い羽根募金とか行きます」と言われて。「そんな部活ありましたっけ」というと、「新しくできたボランティア同好会です」という感じで。やはり何かきっかけにして役立ちたいとか、僕たちに出来る事とか。というふうにもちょっと思えたんですけども。」

3.2.2 B高校のまとめ

以上の語りから担当教員は、サービス・ラーニングによって生徒は学校外の人々との接点を生徒に与え、学校外の人役に立つことによって生徒自らが自信をつけ、学校外の人に指摘されることによって社会性を身につけることができると考えている。こうした影響が生徒の社会活動に対する積極性に現れていると考えているようである。

3.3 C高校での教科「奉仕」

C高校は東京近郊にある歴史のある学校。教科「奉仕」の科目名は「社会貢献」。教科「奉仕」導入以前に学校設定教科の科目として「ボランティア」があり、教科「奉仕」実践校として応募。学校全体の雰囲気として外へ向かって開かれた学校である。受け入れ先は部活動単位で開拓されており、奉仕体験活動も部活動単位で行われている。体験活動は保育・学校施設、高齢者施設、地域の夏祭り、通学路清掃・公園整備などである。事前指導11時間、奉仕体験活動18時間、奉仕事後指導6時間の計35時間で1単位となっている。開講時限は土曜日の3・4時間目である。運営は開講年次である1年生の

担任を中心になされている。

3.3.1 生徒への影響

それでは、担当教員はサービス・ラーニングの影響をどのように考えているのであろうか。担当教員によれば以下の2点が語られる。

① 世代間交流—他者から認めてもらう喜びから社会の一員としての自覚—

「(C高校では、部活動単位で奉仕体験活動に出て行くが、)部活動単位で外に出掛けて行く事によって通常の部活動では経験しないものを体験してくる。そういった効果の方が大きいかなと思います。例えば部活で練習試合とか公式戦とか試合をやっても同世代しか接しないわけですから。そうではなくて外へ行って異なる集団と接したり、異なる社会の関係の中に位置付けられたり。基本的には存在感を認めてもらえるということですかね。要するに感謝されることによって自分たちがやっている事に対しての自覚が出来上がっていく。そういう効果はあると思います。」

「ダンス部と呼んでいます、ほとんどストリートダンスなんですね。この子たちが自分たちの踊りを披露する場所というのは公の場所ではなかなか無いんです。ところが、あの子たちが老人福祉施設に行き実際に踊りを披露しているわけです。そうするとお年寄りたちから「上手」といわれて褒められて帰ってくる。自分たちの為に踊っているのではなくて、お年寄りに喜ばれるものを作り上げているというようなところにもつながっているんだと思います。その意味で自分たちの存在を再確認する、それは全く見知らぬ高齢者の方との接点で自分たちの活動自体が評価されている。そういった接点があると思います。」

② 社会の一員としての活動へ

「それ自体は奉仕体験活動として直接させてる

訳ではないんですが、市の方で3月にお祭りをやるんです。福祉協議会を中心に。学校としては「学年末考査の時期でマズインですよ」という以前に、生徒の方が調整しちゃって定期考査を外したところでイベントをやるような企画になってる。従って「今年も実行委員を生徒さんから出してください」という依頼がもう来ているんです。そういうのは通常の奉仕体験活動が出発点になってそこから発生している活動として生まれていると思います。」

「(就職対策の講演に来ていただいた企業の方のリサイクル衣類の海外送付のボランティアの話に共感して) 学内に回収ボックスが置いてあるんです。1階に。そこに男性用と女性用の古着の回収箱が置いてあって大体1週間で満杯になります。これは生徒会の活動ですが生徒会が全校生徒に呼び掛けて自分たちの家で不要になったものを持ってきて回収という事をやっています」

3.3.2 C高校のまとめ

以上の語りから担当教員は、サービス・ラーニングによって生徒は、学校外の人々との接点を生徒に与えることによって、生徒たちが自己の存在感、自己への肯定的な評価を得て、地域住民としての意識を持ち、地域へ貢献する視点を得られると考えているようである。

3.4 D高校の概要

D高校は農山漁村部に位置する歴史のある高校。普通科と職業科よりなる。教科「奉仕」は3年生で必修。普通科と職業科は合同で授業を行っている。環境整備、保育施設、高齢者施設、障害者施設について全員が奉仕活動を行う。教科「奉仕」開始以前に保育、高齢者、障害者施設への実習を職業科で行っており、教科「奉仕」については比較的スムーズに受け入れ先が決定した。職業科の教員中心にプロジェクトチームを組織し運営している。奉仕担当教員は毎年入

れ替わっている。

3.4.1 生徒への影響

それでは、担当教員はサービス・ラーニングの影響をどのように考えているのであろうか。担当教員によれば以下の3点が語られる。

① 地域の教育力ー規範意識を身につけるー

「地域の力が残っているなど感じます。自分達がやったというよりやってもらっているというか。地域の教育力というのを感じて。「バイトでやったらお金がもらえる」とかは絶対口にしないでしょう。地域の教育効果があるから外でちゃんと良い子に出来るんだらうなと。」

② 世代間交流からー他人への共感、社会の一員としてー

「環境整備活動などで、役場の方が現状を話してくれて、「ゴミをそのまま燃やしちゃうと焼却場が痛んで。そこでは地域の税金が使われるんだよ」という話を。まだ彼らは税金を払っている訳ではないんですが、地域の環境整備に関心を持ったとか「自分もちゃんとやらなきゃいけないな」とか。ゴミ分別のところで自分たちの地域の為になるんだという事であったりとか、思ってくれたところは非常に教育効果が高かったのかと思っています。また、シルバーの方、高齢の方が一緒にやってくれて「こうしなさい」とか色々言ってくれたり、もちろん一緒にやってくれたりとか。最後に生徒が感想を言ったりした時とかに、シルバーの方や役場の方も「こうでしたね」と話しをしてくれたりとか。ゴミの分別にお金が掛かるとかの話しをしてくれたりとか。ゴミの事を高校生と役場の30、40代の人と高齢の60代の人が話しをするというのがまず無いですよ。」

③ 社会の一員としての活動へ

「高校で郷土芸能祭という活動をやっていて1、

2年生は自分たちが出て郷土芸能を披露するんですが、これは（高校内の行事ですが）地域の行事と言っていいほど大きな行事なんです。3年生は以前は関ってなかったんですが、この奉仕に関係して手伝ってもらうという形になってきた。地域の伝統的な芸能を発表する郷土芸能祭のスタッフの一員として関わるという形で。」

「保護者が社会福祉協議会にいる生徒がいて福祉祭りという福祉関係のフェスティバルのところにボランティアとして行ったりとか、たまたま3年生にいてるのですが兄弟に障害者がいてボランティアとして行くとか。その子が声を掛けるから一緒に行く友たちもいて、教科「奉仕」と関ってかどうかは判断が難しいところですが。」

3.5.2 D高校のまとめ

以上の語りから担当教員は、サービス・ラーニングによって生徒は、地域への関心が高まり、世代間交流により違う世代の考えを知ることであると語られる。またボランティア活動を行う生徒もいると考えているようである。

4. まとめにかえて

以上、東京都立高校4校の教科「奉仕」担当教員が語る生徒への影響を次の4点にまとめることができるだろう。

第一に、学校外の地域の人との接点をもつことの影響がある。学校は生徒と教職員の閉ざされた空間になりがちであるが、教科「奉仕」の実習によって、学校外で家族以外の大人たちとの出会いや交流が生まれる。それはさまざまに立場の異なる人々との意見交換を通じ、他者理解の可能性を秘めている。

第二に、地域社会の人々から感謝されることによって、社会に役立つ喜びが得られるということがある。そしてそのことが認められることによる自信につながっていると考えられる。学

校内の活動は、学業を中心としており、そのため人から感謝されることがほとんどない。また、社会の一員としての自覚も生まれにくい。地域社会の人々から感謝されることによって、生徒自らが自分たちが行っていることと社会とのつながりを考え、社会の一員として社会から認められることを喜びとし、その喜びこそが生徒の自信につながると考えられる。日本の若者の自己肯定感の低さが問題となっているが¹⁾、サービス・ラーニングは肯定感を高めるための可能性を持っているといえよう。

第三に、先ほどの社会の一員としての自覚から、規範意識や公共心が芽生えると考えられる。学校での押し付けられた規則と違い、実習では、さまざまな大人との交流から、何が必要なことであるのかを身を持って考えることができる。そのため、社会の一員として社会のために何ができるのかを考えやすいといえるだろう。また、そのことが、第四に、地域社会への関心から、地域社会に貢献する行動を生徒自らが行うきっかけになると考えられている。

ところで、上記のまとめは、教科「奉仕」担当教員の語る影響であり、今後は生徒自身のアンケート調査について、高校の課程内での意識の変化や、高校卒業後の教科「奉仕」履修者と非履修者との違いをみて、より客観的に影響を考えていく必要がある。また今回のインタビューはいずれも全日制での教科「奉仕」の成功例であり、今後は問題を抱えている高校へのインタビューや、定時制・特別支援学校へのインタビューを通じ、より詳細に教科「奉仕」の生徒への影響について見て行きたいと思う。

付記：この研究は平成19年度佛教大学特別研究助成および平成20、21年度佛教大学個人研究助成、平成21年度龍谷大学国際文化研究所研究プロジェクト助成の成果の一部である。また第82回日本社会学会での一般研究報告を加筆修正したものである。

注

- 1) 例えば、財団法人日本青少年研究所などが2008年9～10月に行なった中高校生に対する意識調査では、自己に対する認識として「私は人並みの能力がある」「自分はダメな人間だと思う」「自分の意思をもって行動できるほうだ」では、日本の中高生は、他の国に比較して、自分の能力に対する信頼や自信に欠けているという結果が出ている（千石保・胡霞・阿部あつこ 2009）。

文 献

- 大東貢生・古川秀夫・柴田和子・大山治彦・富川拓，2009，「日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅱ－東京都立A高等学校を事例として－」『佛大社会学』33 佛教大学社会学研究会。
- 千石保・胡霞・阿部あつこ，2009，『中学生・高校生の生活と意識：調査報告書：日本・米国・中国・韓国の比較』日本青少年研究所。

富川拓・柴田和子・大東貢生。古川秀夫，2008，「サービス・ラーニングの研究と実践をめぐる諸課題」『佛大社会学』32 佛教大学社会学研究会。

富川拓・大山治彦・柴田和子・古川秀夫・大東貢生，2009，「日本におけるサービス・ラーニングの展開Ⅰ～東京都立高校における必修科目「奉仕」の創設について～」『佛大社会学』33 佛教大学社会学研究会。

（おおつか たかお

佛教大学社会学部准教授）

（とみかわ たく

聖泉大学人間学部専任講師）

（しばた かずこ

龍谷大学社会学部・国際文化学部非常勤講師）

（ふるかわ ひでお

龍谷大学国際文化学部教授）

（やまだ かずたか

龍谷大学経済学部助手）